

『めねぎのうえんのガ・ガ・ガーン！』

多屋 光孫 文・絵

企画広報室 広報資料課 広報資料係長 日原 雪子



『めねぎのうえんのガ・ガ・ガーン！』
文・絵／多屋光孫
出版年／2021年
発行所／合同出版

当研究所は長らく、農福連携についての研究を進めてきました。15年以上前から研究を開始し、2010年代には農福連携研究チームを立ち上げました。シンポジウムも複数回、開催しています。

本作は、その農福連携に取り組み、障害者雇用を行っている農園について取り上げた絵本です。物語は、芽ネギを作る農園の経営者が、特別支援学校の教員に生徒を働かせてほしいと頼まれるところから始まります。経営者は最初、理由をつけて断ろうと考えました。しかし、芽ネギの植え替え作業が難しいと理由を挙げれば、下敷きを使えば簡単できると指摘されます。生徒に指示が伝わらないと話せば、指示内容を具体的に分かりやすく説明すれば作業ができることを示されます。さらには、ゆっくり草取りをする生徒の作業が、実は丁寧だということも目の当たりにします。

これらの場面一つ一つで「ガーン」という表現が登場します。障害者一人一人の特性に合わせ、指示の出し方や作業環境の工夫をすれば仕事はかどると経営者が気づく度に、「ガーン」という擬音で表されるのです。そして、『『ひとをしごとに』あわせるのではなく『しごとをひとに』あわせればいいんじゃないか？』というユニバーサル農業の核心が語られます。経営者は障害者が働きやすくなるよう機械を発明するなど工夫を重ね、従業員が100人を超えるほど農園の経営規模が大きくなったという結末で話が終わります。

本作のモデルは、農福連携の優良事例として紹介されることも多い浜松市の京丸園株式会社（以下、京丸園）です。同社は農福連携研究の事例分析においても、取り上げられています。例えば、中本・澤野（2020）では、同社が作業工程の整理・細分化や業務分担の明確化、さらにはJGAP導入により労働安全面の確保を行ったことから、障害者のみならず、高齢者や農業経験の浅い女性職員の雇用にも結び付いたことが明らかにされています（本誌関連記事：6～7ページ）。障害者雇用にとどまらない、

様々な立場の人たちが参加できるユニバーサル農業の実践が示唆されているのです。

本作は、そのようなユニバーサル農業の取り組みを子どもにも伝わるよう、やさしい言葉で絵本にしています。私は縁あって、小学校の読み聞かせボランティアを行っています。この絵本を特別支援学級で取り上げてみました。先生に感想を聞かれた児童たちから寄せられたのは、「機械を作ったのがすごい」「最後に100人も集まったのがすごい」というコメントでした。そして、中には「ゆっくりでいい」というところ（が心に残った）」という感想もありました。

実のところ、私自身が一番印象に残ったのも、作業が遅く見える生徒の仕事が実は丁寧で「早ければいいというものではない」と経営者に思わせるエピソードでした。本作は子どもだけでなく、大人が読んでも読みごたえのある絵本です。経営者の目線で物語が展開されているので、大人にとっても入り込みやすいのではないのでしょうか。

本作の巻末には、京丸園の鈴木厚志代表取締役による同社の取り組みについての説明、障害を持つ従業員及びその家族による手記、また「京丸園の3つの秘密」というタイトルの解説も収録されています。それぞれの目線から、京丸園の取り組みについて語られ、読み手にとって解像度の上がる構成になっています。同社のユニバーサル農業、農福連携の取り組みが静岡県や浜松市といった地域全体に広がり、共生社会へと結び付いていく様子もうかがえます。巻末まで含めた本作は、農福連携やユニバーサル農業の副読本として、大人にもお勧めしたい一冊といえるでしょう。

【引用文献】

中本英里・澤野久美（2020）『『ユニバーサル農業』とJGAP導入が障害者の職域拡大に与える影響』『農業経営研究』58（3）：21-26